

南満洲鉄道における小単位旅客輸送

—通学と「動車」の運行の関連を中心に— / 三木理夫 23巻1号、1-23(2020年)

この論文の目的は南満洲鉄道における都市近郊輸送と動車との関係から小単位旅客輸送を明らかにすることにある。本論文は「通学」に関わる学校の分布に着目して都市近郊輸送を解明し、それと満鉄の動車輸送の関係を考察した。本稿の内容は以下の4点にまとめることができる。

1. 草創期の満鉄は小単位輸送の需要が少なく、混合列車の運転でそれに対応していた。1910年代まで開拓地の満洲では学校の開設密度が低く、満鉄社は通学者のためには寄宿舍などを整備して遠距離通学の解消に努めていた。
2. 満鉄初期の都市近郊輸送の主な対象は小学生であった。その後満鉄社は中等教育機関の整備を進め、1920年代に通学用定期割引制度や中等教育機関の拡充を進めた。
3. 1932年に満洲国が成立すると、新たに日本権益の及んだ地域には交通手段の整備を補うため補助的小学校相当施設を設けて対応した。また1930年代以後に炭鉱地域などでの通勤利用も増加してきた。そのため満鉄は動車導入を本格化させることになった。
4. 満洲の短距離輸送で蒸気機関車の牽引する列車は効率性に劣っていた。そこで1930年代から都市近郊輸送用に内燃動車を導入し、輸送の効率性を図った。そして、燃料統制期にもかかわらず1942年度までその使用が継続することになった。